
クロノスブレイカー

しらすらばー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロノスブレイカー

【Nコード】

N5612P

【作者名】

しらすらばー

【あらすじ】

時の精霊【クロノス】に呪われて不老不死となった少年と、少年に命を救われた女騎士の冒険譚。

二人は時の精霊を探して街から街へと旅を続ける。

そしてその中で様々な人と出会い、事件に巻き込まれ、少しずつ成長していく……そんなお話。

クロノス

いつか自分は背が延びて頭も良くなって考え方もしっかりして…
そうやっていつの間にか大人になっていくんだと思っていた。

それはとても当たり前前で自然なことだから、疑う余地も抗う気持ちもなかった。ただ、そのまま気付いたら過ぎ去っているものだと
思っていた。

あの日アレに出会うまでは、一片の曇りもなくそれは明確なこと
だった。

「ああ、君で良いや」

親方の目を逃れるために立ち寄った裏通りで僕にそう声を掛けて
きたのは、ごく普通の男だった。裕福でもなく貧乏でもなく、ごく
普通の…本当に何処にでも居そうな普通の外見をした男だった。

いや、今思えば本当にアレが「普通」だったのかどうか自信が無
い。アレは自分自身を偽ることに長けているから、その時の僕がた
だ騙されてしまったただけだったのかもしれない。

とにかくその時の僕は声を掛けてきたそいつに対して何の警戒心
も抱かなかった。言われた言葉の意味は理解できなかったけれど、
笑顔を浮かべて近寄るその男には警戒する点なんて一つも無いよう
に見えた。

だからその男が僕に向かって手を差し出してきたとき、逃げるな
んてこと思いつきもしなかった。

そして、そのことを僕は後になって激しく後悔することになっ
たんだ。

二人の旅人

空は嫌になるほどの青空だった。断片的に浮かんだ雲はどれも透き通る様に真っ白で、まるで白いシルエットのようだった。太陽はここぞとばかりに照りつけて街道を歩く二人の旅人を焦がしている。旅人たちはどちらも簡易な革鎧を身につけ、巨大な荷物を背負っている。これではどんなに屈強な人間でもたまらないだろう。特に背の小さい方は今にも倒れてしまいそうなほど背を丸めて辛そうに歩いていた。

しかし傍らを歩くもう一人の背の高い旅人の方はそれより更に多くの荷物を背負っている。にも関わらず背筋を伸ばし疲れの見えない無表情を貫いて、ただ前を向いて淡々と歩いている。小さい方の旅人は傍らを歩くその姿を見上げて大きな溜め息をついた。

巨大なリュックサックと背中の中に然り気無く挟まっている巨大な剣、サックに収まりきらず腰からぶら下がる鉄のグリーブ、そして身に纏ったままの革鎧と肩当て。こんな格好をしてこれだけの荷物を運ぶのは例え筋骨隆々の男戦士だとしてもかなり骨が折れるだろう。しかし平然とそれを成しているその旅人は長い黒髪の長身の女性であった。

「…やっぱり、自分で持つよ」

しばしその姿を見上げていた小さい方の旅人は、耐え兼ねたように口を開いた。

「気にするな。大した重さじゃ無い」

しかし対する女性はそれに軽い口調で言葉を返す。普通に考えれば彼女の背負う荷物は誰から見ても「大した重さ」に相当するだろう。しかし女性の表情を見るに、彼女が無理をしたり強がりですう言っているのでは無いようだった。

小さい方の旅人はそんな女性を見て苦笑いを浮かべた。女性の顔を見た後その視線を背負っているリュックサックへと移し、最後に

自分の背中の荷物を意識するように方紐に手をやった。おそらく彼の背負う荷物は女性の背負っている荷物と比べると3分の1程度の重さにしかならないだろう。彼女のあまりに桁外れの腕力に対する賞賛のためか、それとも自分自身の腕力に対する落胆のためか、少年は小さな溜息を漏らした。

「……休むか？」

女性が言葉を発した。相手を気遣う言葉ではあったが、その声音は心配している風な響きではない。感情の薄い事務的な言葉であり、感情というものが感じられない硬質な響きだった。

それに対し少年は慌てたように首と手を左右に振り回し、傍らで首を傾げる女性の顔を見上げてわざとらしく笑顔を浮かべてみせる。「いや、別に全然疲れてないよ？流石の僕にだってこの位の荷物は持てるって」

本当のことを言えば、荷物は肩に食い込み「重さ」よりも「痛み」を少年に与え続けている。しかし目の前に自分の何倍もの荷物を背負う女性が居ると言うのに「重たい」だの「疲れた」だの言えるはずがない。どんなに自分の非力を自覚していたとしてもそんな弱音を吐くことだけは出来ないのだった。

「……そうか？」

「僕のことは気にしないで良いってば。そっちこそ、疲れないの？」
尚も感情のこもらない気遣いの言葉を投げかける女性に対し、少年は質問を投げ返す。本音を言えば少し休みたい気持ちはあるのだろうが、それを自分から言うのだけは絶対にしたくない。

その言葉に、問われた女性は空を仰いだ。足取りが不意に緩み、少年が彼女の一步先に行く。何事か考えているらしい。

「……そうだな」

たっぷり三十秒は沈黙してから、彼女はようやく口を開いた。

「腹が減った」

言うが早いのか、その腹の虫が大きな蛙のような声で一つ鳴く。あまりのタイミングの良さに少年は思わず笑い声を漏らした。

太陽は空高く上りほとんど真上に来ており、二人の影も円に近いほど短くなっている。少年は首に下げていた銀色の鎖を引いて細工の施された美しい懐中時計を手を取った。文字盤を見ると、その針は既に午後に入りかけている時刻である。

「そっか、もう昼過ぎてたんだ。お腹空いてるならもっと早く言うてくれれば良いのに」

「……いや、私も今気づいた」

口を尖らせて少年が言うが、彼女は相変わらず感情の薄い声で言う。その言い種が可笑しくて少年はまたも笑った。

「それじゃ何処かで休もう。小川でもあれば良いんだけど……」

少年のその言葉に、女性は再び空を振り仰ぐ。しばらくそのまま黙り込んだかと思うと、突如として歩みの方向を変えた。どうやら水の音を聞き取ったらしい。

「ちよつと待つてよー」

無言で歩く彼女を慌てて小走りで追いかける。その向かう先はおよそ人の踏み込んだことの無さそうな暗い森の中だった。

さわさわと鳴る木の葉と耳に心地よい鳥の声。透き通る清水の流れる小川を前にした草地に、二人は荷物を下ろした。肩に手をやり腕を振り回す女性を他所に、少年は一目散に小川の淵へと駆け寄る。透き通る清水で手と顔を洗い一息つく心地良さそうに呻った。

その隣に革鎧を外し終えた女性が革袋を手に見れる。あれだけの荷物を運んだ後なのだから汗もかき喉も渴いている筈なのだが、どうやら彼女にとつてそれよりも水汲みの方が優先事項だったらしい。

少年は顔から水を滴らせたままでそんな女性の顔をぼんやりと見つめた。

「なんだ？私の顔に何か付いてるか？」

その視線は水を汲む自分の手元に落としたままで、やはり感情の

薄い口調で女性がそう言う。少年は少し決まり悪そうな顔をしてから悪戯そうな口調で言い返す。

「うん、目と鼻と口が付いてるよ」

「そうか、それは気づかなかった。眉毛はどこに落としたかな？」

少年の冗談を更に冗談で返す。ほんの少しその口調に楽しげな色が浮かんだ。水が革袋に一杯になったところで少年の方を向き、不器用そうに口の端だけを持ち上げる独特の笑顔を見せる。彼女にとってはそれが精一杯の笑顔らしい。少年の方も笑顔を返した。

「顔でも洗ったら帰ってくるんじゃないかな？」

「そうか、ならそうしよう」

尚も続ける少年に向けてそう言うが早いか頭を勢いよく水の中へと突っ込む。水が跳ねて水面がさざめき、彼女の長い黒髪が川の流れに浮かび上がって流れる。魚にとってはたまったものではないだろう。

そんな野性味溢れる行動のせいで顔どころか着ている服までびしょ濡れになっているが、彼女はそんなことはお構い無しの様だ。流れに頭を突っ込んだままで何事か言っているらしくゴボゴボと水面に気泡が浮かんでいる。それを見て少年が更に笑った。

「乾く的时间掛かるよ！……って聞いてないか」

呆れたように独り言を言ってから、マイペースに冷たい皮の水を楽しんでる女性の傍らから水でいっぱいになった革袋を取り上げる。草原に放り出したままだった荷物の方へと先に歩き出すと、水音が後ろから追いかける。清水を楽しんでいた女性の方が漸く顔を上げたようだった。

振り返ると、まるで獣のように頭を降って水気を飛ばすその姿が少年の視界に入ってくる。そのあまりにワイルドな姿に少年は再び笑いを漏らした。

この先の道は遮蔽物が少ない上、太陽も陰りを見せる気配が無い。午前中よりも苦しい道程になることは想像に難くないだろう。ここですっかり休息を取っておくことは間違っていないだろう。

ただし、少年には一つだけ不安の種があつた。噂に聞いた話によるとこの川沿いには時折盗賊が出ると言うのだ。二人とも戦えない訳ではないのだが、盗賊の撃退によつて休憩時間がつぶされてしまうことだけは避けたい。

「眉毛が帰つてきたぞ、チエロ」

そんなことを真剣に考えて居た少年の横にほとんど全身びしょ濡れになつた女性がひよつこりと現れる。しかもまだ冗談を続けているらしい。難しい顔をしていた少年の表情が思わず緩んだ。

「眉毛は大切にしないとね」

「大切にしてるさ。…そんなことより、今日の昼飯は？」

「そんなこと、だなんて言つたら眉毛が拗ねるんじゃない？」

更にそんなことを言いながら、少年は鞆から出した大きな包みを手渡す。それを受け取つて女性は木を背にして座り込んだ。

「私の眉毛はそんなに狭量じゃないから大丈夫だ。…：…なんだか思つたより小さいな」

やや乱暴な手つきで包みを開いて中身を確認した女性は、帰つてきたばかりの眉を八の字にした。その手の上には誰がどう見ても「特大」サイズであるう立派な握り飯が3つ綺麗に並んで鎮座していた。

「特大で頼んだんだけどなあ…：…足りなさそう？」

「少し物足りない感があるな。…：…まあ言つても仕方がないからな。頂こう」

そう言つて女性は両手を合わせる。少年は彼女に気付かれないように思い切り不可解そうに眉をしかめてみた。まさか、あれだけ大きな握り飯を3つも用意したのにまだ足りないと言つとは思つてもみなかったのだ。

「俺、ちよつと周り見てくるよ。ヴィオは食べてて」

「了解。…：…気をつけてな」

握り飯を頬張りながら手を振る女性に背を向けて、少年は小川に沿つて歩き出した。

盗賊

少年は森を歩きながら周囲を注意深く見回す。小川の横を離れなように歩きながら、木々を注意深く観察していた。

(ほんつと良く食べるんだからなあ……)

彼が探しているのは果樹であった。女性の割りに背も高く、筋肉質な彼の相棒は非常に良く食べる。そこいらの男よりもはるかに良く食べる。あれ程の量の荷物を持ち運び尚も疲れを見せないだけの体力を維持するのだから、それ位食べたとしても確かにおかしなことでは無いのだが旅の中では困ることもある。そう言う時には少年がこうやって森の中から木の実や魚を取って持ち帰ることが多くあった。携帯食料を足しにすることもあったが、なるべくなら自然の中の物を使ったほうが経済的だ。

特にこのあたりは温暖な気候と豊富な水があるため、野生の果樹が育ちやすい地域でもある。こういった野生の植物を探すことも旅の一つの醍醐味だ。少年は近くの木から枝を折り取り鼻歌を歌いながら散策を続けた。

(……あれ?)

辺りを見回しながら歩いていたら、ふと何か聞こえた気がした。小鳥のさえずりと草や木の葉の音の間に、かすかに別の音が聞こえる。自分の足を止めるがやはりその音は止まない。それどころか、徐々に大きくなってきている。どうやら近づいてきているようだ。

ふとこの辺りで噂になっている盗賊の話思い出す。川沿いで休んでいる旅人を襲い、場合によっては拐って売り飛ばすのだと言う。屈強な戦士でさえも被害にあったことがあると言う。

いきなり逃げるのは得策とは言えない。土地勘のある相手なのだから、その先に罠を仕掛けられて居ないとも限らないのだから。少年はベルトに結わえてある小刀の柄を握り、音のする方へと油断なく身構えた。

音が大きくなる。草のなる激しい音が近づいてくる。誰かが疾走し、向かってくる音だ。どうやら1人の様だがそれでも油断は出来ない。全身を耳にしながら少年は真剣なまなざしで音のする方向を見つめた。

やがて森の中、草の根を分けながら一人の青年の走る姿が見えてきた。必死の形相でこちらへ向かってくる。武器を携帯している様子はないが、まだ油断は出来ない。自分から声を掛けることはせず、少年はじつとその姿を見つめた。

やがて相手は少年の姿に気付いたらしく、荒い息の間から叫び声を発した。

「ああ！どうか助けてください！」

その青年は身構えたままの少年の姿にやや躊躇したようだったが、それでも駆け寄る足を止めることはしない。ようやく少年の目の前にやって来ると青年は膝に手をつけて肩で大きく何度も息をする。あれだけ必死に走り、叫んだのだからそれも仕方ないことだろう。

武器も敵意も無いらしいことを確認して少年はようやく小刀から手を離れた。相手が息を整える間、その姿を観察する。短い黒髪と飾り気のない服装。かなり汚れてくたびれた革靴を履いている。旅人かもしれない、と少年は思った。

やがて声を出す体力を取り戻した青年が荒い息の間から言葉を発する。

「あなた…旅の…人かい？助けて…欲しいんだ…俺の荷物を…」

「待って、まず落ち着きなよ」

少年は腰に結わえていた革袋を差し出した。中身はさつき川で汲んだばかりの清水だ。青年は一瞬ためらいを見せたが、革袋を受け取り一気に飲み干した。それだけ必死に走ってきたのだということだろう。少年はちらりともう一度汲み直さなければならぬ、と頭の隅で思った。

「で、どうしたの？荷物がどうか言っただけでなかった？」

「盗賊が…ああでも君みたいな子供には無理だな…近くの町で頼ま

なくては……」

落ち着きを取り戻しつつある青年にそう問いかけると、彼はようやく相手が年端も行かない少年であることに気がついたようだった。慌てた様子で辺りを見回が、この近くに町などない。やはりまだ平常の判断は出来る状態で無いのかもしれない。

「町なんて半日くらい行かないと無いよ？だから、落ち着いてよ」

そんな相手とは対照的に、少年は落ち着き払って青年を制した。はるかに年下に見える少年が慌てふためいている青年を冷静に制する姿は中々奇妙なものである。青年もそんな自分に気付いたらしく、ばつが悪そうな表情になった。

「大事な荷物？急ぎで取り返さなきゃならないの？……もしかしたら、俺の連れならどうにか出来るかも」

「お、お連れさん？」

「まあいいから、着いてきてよ」

それでもやはり焦り顔の青年を尚も制して少年は返答を待たずに来た道を引き返す。少しの間青年は逡巡する様子を見せたが、観念したのか少年のに付いて歩き出した。すぐに少年の横に並ぶと、不思議そうに少年を見やる。

「……君、旅人なのかい？」

「うん。……お兄さんもそうなの？」

「まあ、そんなところさ」

「ふーん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5612p/>

クロノスブレイカー

2010年12月18日04時25分発行